





町人囊卷四

或人けえ男女たふ厄やといふ事あり町人よりつとむるを
 くは人多し唐土たうどの書中にも見ゆはより此故より
 唐人の厄といふ事は醫書の中にも男女七歳より
 九年くわんの陰陽いんやう変へんとるゆゑ是で大忌たいしの歳
 といふて慎しんととわりて或人の云男子は少陰せういん乃すなは較
 といつて形かたちを成なりゆゑ八歳より氣血きけつ定さだり十六歳
 まで精通せいいつうしかれゆく八年はちねんばいて氣血きけつ変へん五
 八はち十じゅう歳さいと血氣けつ満みちて二十歳よりろろく血氣けつお
 ころへゆゑは二十歳にじゅうさい迄いた秘ひのもといふよりたれ漸かんく

血氣愛して八十六四とて血氣中より精はく
とちり女人の少陽の較りて形成成ゆよ七歳より
血氣定り十四歳とて經水より五七三十五歳とて
氣血滋う積り漸く中より七と四十九歳にて
經水絶血氣中より懷胎を是又醫書の説なり
人よりて少壯不同なりといふも大概かくれぬ
角人の四十以後より陽氣衰へり時をされい身の
老生の内より禍福乃事い定り貧富は此よりけし
といふるなりけし入るるを商賈の人を致して身
代はつる人なりけしと惡く事而にわはるる

わはるるを其何かにわらるるをわはるるなり
なりと云うけしを輕くしけしを重くしけしを輕くし
或學者は云酒の量は氣なるといふと惡くわら
人後氣といふ醉狂の事と云うたなる誤也氣は
及ぶといふをゆるり氣をさるゆと氣は乃ふとい
よりわはるるの事にもさる氣は及ぶといふ也
世俗の人嘖嘖は論放客の事といふとさる氣は
乃ふと云うる是は氣は乃ふ所の誤と云ふ多醉狂
といふの也氣の量い氣は醉狂乃儀といわると
始り人酒をのめ中は酒が酒をのめ終るとは

酒人と飲とも酒が酒飲れ也酒う人と飲い是
を酔れと易の酔れ酒と飲て首公儒と亦節
と不知つる首公儒とい酒の酒のし也節と志
らほいゆのまろ酔れれ加減をさるる酔れ
又此うなり武士の上いも人育ちよきれて酒と
事とそれ町人の上い主人され酒のれ多とつる
あふれいふいふの著といふい今れ質朴あり
つるのまろ酔れれ王始めて象牙の箸を造る
箕子とい賢人は是とて王驕りれ公室も象牙
牙の箸はくは是より又玉の杯と造る人といひよ

案のまろ玉の杯と造り是よりて略く英葉なり
驕るとおもふも唐土の天子は常に象牙の箸は
用ひといふ驕りといふは程のまろは孫共天子とい
とも古い象牙の箸は用ひ事ありけり木乃箸を
用ひてるより近代唐土より象牙の箸いふより及
と瑪瑙琥珀とて造る玉色に彫物多し持後
又今人奢るはたより人の唐も日本も末代の
適美に同じとるより延喜式は宮女の数に官位
かさへ角の指揃と用ひ事不け官位あらぬ角
の指揃とさるとるより玳瑁やの昔の筆の外に

櫛くしの造りて指さしる事ことは今代いまよの玳瑁たいまとの鼈かめ甲こう
との弁へんのつ及およと櫛くしの造りて下賤げせんの女をと常つ小
頭くちよりていふるは角かくの櫛くしをい多おほいてはと人
の玳瑁たいまもの賤せんとの其その上うへに金銀きんぎんをのりて
て是これをさすさふちうぬぬとの櫛くしといふれ
或人あるひとれはようけの事こと餘あまに自由じゆうありのよめめなる也なり近
代きんたいの物もの毎まい巧くわうふ自由じゆうありの物もの多くおほく出でるなりとの人
同おないじうは實じつ係けいなるなりは古ふるの人の至欲しよく實じつ係
めて世智ぜち辨べんよりなり成なりるなりは信長のぶなが公こう時代きだいよりて
櫛くしといふなりのなり櫛くしといふて大おほなるなりをのりて

衣服いふくのなりは種しゆははさみてめめげげせせるなりやじ
うう人ひといふなり鈍どんなりなりとの櫛くしの才さい覚かくユユままなるなりを
やや見みるなり至欲しよく質しつ朴ぼくなりなり也なり古ふるの火ひくく袋ふくろ今いまはは中なかつ
中なかつ着きるなり衣えとの古ふるの火ひくく袋ふくろいいたなり布ぬい又またいいた
くくははとのちちややいいげげるなりとの櫛くしといふて大おほなるなりをのりて
乃すなはちち着きるなり七寶しつぽうをかかささるなり世よにに新あらたといふ
或人あるひとれはよう講かうといふなりのなりははくくわわるなり古ふるよりより有あるなり也
ままのなり講かうのなりままとの不ふ知ちてなりままのなり講かうとの好このむなり人ひとの
寂明じやくめい寺じ教けうけののなり貪くわん念ねんのなりとの成なりてなり古ふる乃
講かうといふなり一いつ郷かう一いつ村そん毎まい月げつはは目めにに定さだてなり宴うたひ合あひてなりお

親と學問有人なり公招きて二社の説宣ふ公儀よ
その御壁書多と候とて謹て聽聞し或い出處と請
して經文れ一句を講説せり或い其家門の教は亦
是事と講せりて是を聽聞し又い面々相多し
信公乃志公よりて本公の誠をばしなすあうん
事と秘し是と講といふ其古語の一句を講
説よりゆかり近代の講の酒と吞せりよりゆかり
はくそて誠と云ふれ多しけり事ありて結句
口論放多の媒とかりさるる多しといひ終り
或人の云んれ公いかりさるるのなり唯今あ人對て別

るる人ありといふ人より公招きて公儀よ
い戯とありといふ堪忍あり一命とせけるあり
し又い血氣の勇者あり相撲と名付りけり
諸人の前とせばさういふ是と云ふ公儀よ
おさわりお多いてさういふと入いありこれを
ひてさういふ強の怪と云ふ業門と云ふ者をは
盗人と名付て人々怒りてお擲と云ふ借用と名付て
千金れ重と云ふれさういふあひ人ば相撲と云
嘩と云ふのあひり事い同し盗と借用と人々物と
さういふ事いおれといひて笑ふ

或人のいふに正立九月をよりけは月あるとて候事
を得に博識の學者の言はれしにまじりて此の如き
候に佛書の中にいふ九月を斎素月とせん
といひ此三月は死刑殺せと禁じたりなり委しく
事類全書に云く何れも唐土の事なり
我が日本にていふ九月を忌むるを忌た忌事
なは佛の月なり善事いふ九月より
約してことより何の忌候事あり
或學者の云々季は彼等の四氏はの善根と候一佛
寺ふ事候とむなりぬ候也二月の中節と春分

といひ八月の中節と秋分といひて晝夜の長短大形
ひくも時節也此時日輪天の中道とあり候なり
天地の氣溫和なり人む仁慈と約してより
へは理也但彼等の中日い毎春分秋分の日より後五
日め公用するもの也日輪天の中道をめり候より
五月と月あるを得たる也但天竺の運氣とて定
まらぬといふ人むは天竺の運氣と日本にて
用あるを言ふなり鬼角につまみても春分秋分の
時の天氣溫和の節あり寺院の静なるも徘徊して
一日乃月分樂人も又むむなりといふ

或人の七月は盆を二偏は佛道の儀なりといふに七月廿
五日と申すの日といひて儒道の位牌を祭ふ事あり
いづれも祭るに三日又七日潔斎とあるものいふに
祭ると致さん人いふ二日なりと潔斎勿論の儀也燈
籠も張るに天竺佛はの儀なりといふに唐土にありと
いふに又日本にては聖霊祭の祭と一向は佛はの
を用ふるものありといふに秋青萱の蓬土器麻の
の着るに唐土の松子にありて神道の玉祭の祭
なりといふに又二偏は佛は儒はといふに神道乃
風俗也一佛は日本にありといふに又七月は玉

祭といふに佛は神道の祭といふに古禮を用
ふるに二偏は佛は儒はといふに又二偏は佛は
を佛は後で宇蘭盆の祭といふに又二偏は佛は
を人部といふに盆の禮といふに又二偏は佛は
方とて盆の禮といふに又二偏は佛は
用括りて鳥丸光廣卿和尙の師なるを七月十四日
盆の禮といふに又二偏は佛は
の事ありて神道といひて儒佛の儀といふに又二偏は
ては盆の祭といふに又儒道の儀といふに又二偏は
する事いふに人百姓いふに又二偏は佛は

方て常の人につくる事を他国に傳はせりといふは
りや夫より毎日月星辰の事なり及て地も其中に
ありて天地神明を盡く系縁の天子也其中心日月を
度人と和國の風俗を志して神明の神を神とて
拜するに憚るは何れを以て本心の誠とて惡
念を降伏せしめ此災禍を後の清くんの事をい
誠とせしめ神明日月を拜ししとて又曰論語の
疏食菜羹といふを志と志といふに強ちに祭祀の
小なりと時の初物を以てするも志といひて若
し其證拠也とて日月待日待は神供とて備る

あるは志といひては憚るは七祭禮の儀の各別な
まといとていふ日月待日待は又酒小等三味線
て遊んで夜を明とて人の清月様清月様とてのま
を報ゆるに志といふは志といふは志といふは
或人の物語に謡平家舞いする及て津留璃小等の歌
り昔のいふ教誡たぬと志といふは志といふは
善惡を訓て勸善懲惡の儀に人れを以て和を
る也津留璃の信長とて代より始り義経のやい人
津留璃の事とてけりて音曲とて其後志の
比りて西の宮乃傀儡師とていひて人形とて

より其の津瑠璃みる義経紀平家物語
語の内紙からやけき事多しりた近年の津瑠璃と
よものいけふれどけと第一するもの邪欲の媒
とめて人をそこする思ふ又事きものなり
るの始に女樂より山雲の土社に巫女を國く又美女神樂
を玄て舞出京都にありて奇舞妓の曲はなせ
より潮とせぬ思ふて人の心を薄し誰うて人を
このやうな思ひに依て高代女樂と津瑠璃制り其
後又美男の少年といて義経とさうい思ふ又諸人を
誰と事女樂といひ甘樂の男の誰とことた美少人

乃義の男女は小誰と事育のふ又思て林か後ひ
て美少男の額髪と剃ちて長年のゆけで義とふ
さう思て野郎と早に野郎といひ之薩摩の詞也
ちれ今都の野郎の額髪と僅に二銭に此廣く
剃て常より紫の額帽子とけけぬ又曾て長年の姿
えはるく女山家もあはてゑは蕩と事たれ
其一人かたは思ふさうも也野郎傾城誰
うして身代破滅の町人東夷中に多きもの也遊
女所をなれをさうさうなれた数万人都
會の地より旅人多く其故其中より

津江で淫乱者なり有て人の妻とてそのにやうな
 をとていふ或いはやうなるものいふ西軍切害具外
 将に異ふふなるや聖人の清世ありては未代
 よいなくてやうなる事なるゆゑ此悪事にやうなる
 つゆふ遊女所といふ後よりいふに至るやうなる此
 故に繁栄の地といふ遊女有る事也之を本玉作はなる
 人のあ止事と得ててそとて遊女所なる人
 是は後世とすものなり万人のやむに及ばぬ
 事なる事ありて此理を教ふる遊女を教へ人々
 止事と得るやうに不作は者の同教とていふに
 情

おの遊女白拍子なりといふ教へるは又い佛道の
 こころをいふやうな事ありて人の教訓となる事
 をこれぞといふ遊女奇舞妓の教へるやうなるもの
 と多かりとていふやうな事ありておのふやうなる
 の教へる其唱雅いふ事なり人れを和を世俗の教訓
 といふ事なり多し童幼のものなりやうなるもの
 へて代をいふやうなる事ありて有て上なる人なりと
 教へるやうにいふやうなる事ありて其唱雅
 といふ事なり後よりいふに淫乱不道の婦人ありて
 若き町人ありていふやうなる事ありていふに

或人のそふ童のわさけらぬる業ありと云ふ
ある事いひ具子細なる事多し事多し事多し事多し事多し
道理と云ふ事いひある事多し事多し事多し事多し事多し
この事と云ふ事多し事多し事多し事多し事多し
紙書し初めは常に陽熱盛なり故に春陽の時
其氣のよく過る故に紙書と造りてさうく
是を掲て童児よりせしめ用ひて内熱を上り
減して病をさしめさうくするやと續博物志に
り今代目をしるの事いひ廣く不けりさうく
て寧ろひるさうくする童子いねを長年し事多し

是と云ふ事多し事多し事多し事多し事多し
子は寒性といふ事多し事多し事多し事多し事多し
の事多し人れ氣盛なりと云ふ事多し事多し事多し事多し
しと云ふ事多し事多し事多し事多し事多し
かたれと云ふ事多し事多し事多し事多し事多し
事多し事多し事多し事多し事多し
しと云ふ事多し事多し事多し事多し事多し
しと云ふ事多し事多し事多し事多し事多し
て童子た地を打事多し事多し事多し事多し事多し

ともお世の名をいへばあるけうけうまのよきて
 つまらぬ其子息安成とけうけうまの重名おもなの
 下しもに丸まるをける事こともふといふ澤さわに入る器き也なり
 けうけうまといふ所のなりとて或書あるくふ人けうけうま
 をまゐるともあつたといふ人丸仲丸のといひて
 せられまゐるの名は其係けいとてあつたといひて
 とらゝる結むすり町人百姓のよ丸とけうけうま
 が丸といふと常に丸仲丸仲丸と身みと息安成
 といふや異國いこくといふ人けうけうまと名をける
 けうけうまけうけうまといふ町人鯉こい魚ぎょと名をける
 けうけうま

清子の名と鯉こいとけうけうまの数は古の人けうけうまの韻鏡うんきやうを
 みて古歌吟味こかぎんみでける事こと和漢わかんの道みちに紙しをてゐた
 い實名じつなをて古歌と撰せんいてけうけうまは福壽ふくじうと名を
 を受るやいぬといふ古の町人百姓といふ清子の
 假名けなありけうけうまは後世ごせいにけうけうまといふ人庶人しやうじんといふ
 名はけうけうまの多しといふ其風俗ふうそくといふと土民どみんといふ
 移うつるもの也といふ清子の名は官名くわんみといふといふ町
 人百姓といふ事也古の町人百姓の数は二字名
 をけるといふといふ此いふ事をてゐる人今けうけうま
 清門せいもんをけうけうまといふ町人といふ町人といふ

時節ありていつれにけりいふ事なりや何の言
しきふちて害なりとのちりといふ

或書ふ日本に異國は遠いて神系と云ふいふ
て高家みな神明の血脉なる所道德廣才遠き
人の心と公家武家の中より出づる者なり或人は
を論じていつ此書の説具理いふ事なり此植て
みよれのとてなりはといふ可い誰かか事
なりきき意にけり人の心なりや又人間に法
立の神物なり其始る所の處なり都鄙のちり
かちれは出胎之後漸くちり深る處よりなる

尊卑都鄙の品お分ふ此教は都の小児都を成長
する所は則鄙人の風俗なり鄙人小児を都を成人
せしめ則都の風俗となり所人の中は其先
祖歷くる處に者見えてはとて常は所人は替
る人品なりは愛宕殿書とあるに武家のありと
る名なりは所人百姓の子なり知なりなり
よんで篤實廣才なる者なり若より多く出づる事有
總て高き人の胎内より氣は觸れよけり所
のちりなりは所人合はる衣服のちりなり
うら矢墨筆のちりなりといふ中き物をばふ

とぞいふやうに事なかりて成長あるのみ能
書文学才藝成就は妻一人百姓の子に胎心より
市井の風俗より幼少より勤る水汲土堀の業又
いそぎら細工多岐所作とする故より足筋骨とし
わしと云ふはまこと能書文学乃暇の偶暇
有るても筋骨こそて筆とては又堪能書の
嗜ある人の如きは障子とて見つゝあけとせ
とてつるゑと下賤士民の子なり夫れ生より具優
富貴の故て成長よりなる能書文学の誉れ
有る人多く出づるゆへに剛臆をい貴賤

よはるにわかれぬいひあひあはれよとわくも見ゆる事
多し人貴人の血脈いふまゝの君となり理あり
胎教のみは幼儀のまゝいふもさるる也この
侯きて德行博才の人となる理なりとて生
立わかれい不徳無能の人と成るゑとありいふ
元早れ血脈といふ胎教の道と守りて胎心より
育ちまゐるに筋骨あはれとてい君子は優秀を
幼儀を習ひ才藝とてわくもいひ事ある
天性命分れ品は優く美悪鈍智の形あり方々
具人品高俊高官の人とありやうと畢竟

人間に根本此より早かりき理は唯此に在る
と知く傾城い多く下賤なる者の子なれども
幼少より風流より多き者あり諸人と誰なるの
望風俗とあり況や人間本公の上の世ありて何ぞ
貴賤の別ありてあるは賤の如きも貴とて
かゝ万人の上より延んものなり武家の氏名とて
家世威と運く者ありて家なり町人の氏名
を多つるい必と貧乏の相なりとや
或人の云茶湯の鎌倉北条の末は興つて高時のは
武家は教人の多くて千劍破の城寄手た而も

茶湯と致して遊ひくははた平記よりなりとのり
足利將軍義政公に在りて盛ふ世の風流とあり人なり
足利教人の多くて茶人たて世よりて廣く
た岡孝吉公は平時ふりて士庶人たふ世道とて
是れより人なりて世に人なり其根本は禪家隱遁
者の神をとりて質素閑静とありて世に然る風流道
義れよりなりて世に質素閑静とありて世に然る風流道
わに閑静とありて世に質素閑静とありて世に然る風流道
さ北条の末にあり高時は長義政公に盛ふとて
秀吉公は驕世に遍く是れ何れなりて世に

代るれい不吉の兆^{しるし}よりしるや南代^{なんだい}よりてい千年^{せんねん}の
 来の治世^{ちせい}されい光^{ひかり}茶湯^{ちやとう}の道^{みち}塵^{ちり}の影^{かげ}へは事^{こと}を想^{おも}ひ
 結^{むす}句^くをわけて茶湯^{ちやとう}昔^{むかし}れい^いも^も影^{かげ}の^うは^は是^{こゝ}其^{その}
 道の損^{そん}徳^{とく}利害^{りがい}人^{ひと}皆^{みな}わきま^をあ^らわ^せる^るや鬼角^{きかく}奇^き羅^ら風^{ふう}
 流^{りゅう}乃^{すなは}公^{こう}用^{よう}う^うお^おれ^れい貴^き人^{にん}も^も後^ごの樂^{がく}介^けて町^{まち}人^{にん}百^{ひゃく}姓^{せい}
 乃^{すなは}歌^{うた}へは道^{みち}よ^よい^いわ^われ^れを^を院^{いん}茶湯^{ちやとう}と^とん^んと^と竹^{たけ}の筒^{つつ}
 瓢^{ひょう}盞^{さん}れ^れい^いと^とと^と春^{はる}て^ても^も其^{その}を^を用^{よう}静^{じやう}清^{しやう}浄^{じやう}の^の
 是^{こゝ}と^とは^はの^の茶^{ちや}人^{にん}い^いと^とと^と人^{にん}い^いわ^われ^れた^た其^{その}を^を用^{よう}静^{じやう}
 清^{しやう}浄^{じやう}れ^れ今^{いま}の^のわ^われ^れら^らふ^ふ粉^{こな}ぐ^ぐ茶^{ちや}公^{こう}用^{よう}ひ^ひて^て茶^{ちや}人^{にん}
 と^とい^いわ^われ^れた^た本^{ほん}来^{らい}自^じ然^{ぜん}の^の深^{ふか}遠^{えん}者^{もの}を^をい^い何^{なん}を^を好^{この}む^む

何^{なん}と^とい^いて^てえ^えや町^{まち}人^{にん}百^{ひゃく}姓^{せい}わ^わく^く是^{こゝ}未^{いま}の^の人^{にん}は^はま^まの^のい^い
 きん^{きん}と^とい^いわ^わつ^つる^る茶^{ちや}公^{こう}用^{よう}好^{この}む^む人^{にん}あ^あら^らふ^ふ只^{ただ}茶^{ちや}公^{こう}の^の
 酒^{しゅ}と^と嗜^しむ^む人^{にん}の^の只^{ただ}酒^{しゅ}を^を飲^の茶^{ちや}公^{こう}用^{よう}好^{この}む^む人^{にん}の^の茶^{ちや}公^{こう}を^を飲^の
 一^{いっ}共^きあ^あら^らふ^ふ飲^の食^{しょく}なり^{なり}然^{しか}る^る酒^{しゅ}と^との^の茶^{ちや}公^{こう}用^{よう}あ^あ
 人^{にん}い^いま^まも^も茶^{ちや}公^{こう}の^のう^うわ^わく^く道^{みち}具^ぐ器^き物^{ぶつ}の^の風^{ふう}流^{りゅう}と^とる^る
 事^{こと}と^とさ^さる^る茶^{ちや}公^{こう}用^{よう}と^とい^いて^ても^もた^た風^{ふう}流^{りゅう}と^と好^{この}む^む人^{にん}を^を
 得^える^ると^とい^いて^てい^い

或^{ある}人^{にん}の^のい^いわ^わる^る町^{まち}人^{にん}の^の儀^ぎの^のや^やい^い今^{いま}茶^{ちや}公^{こう}用^{よう}貯^{ちよ}へ^へを^を書^か
 へ^への^のい^いわ^わる^る蜘蛛^{くも}れ^れと^と網^{あみ}と^とい^いて^て居^ゐる^る物^{ぶつ}
 の^の命^{いのち}と^とい^いて^て食^くふ^ふと^とい^いて^てい^いの^のも^もあ^あら^らふ^ふに^に唐^{たう}土^ど

り王守一といふ人の蜘蛛の居あつた物の令とれ
て食する事此惡く常は竹杖として蜘蛛の
網をさるゝひは破り云々といふはさるゝ人蟻
いふは義あるまじき此はまの偏は義の字は
添ふ終日は来して食物を求め穴中に貯へて
冬の間食とゆふと求むる食ありておのま
ひられ食を穴に充て居る飛くまは町人の要方
小佛といふて財を求め家門とまじき蟻乃如
く食は油ありて家此をもちて蜘蛛の智
謀ありて物の令と誅罰と此はまの偏は義

乃字は添ふ誅の字は略して朱の字はけり町
人の見は惡しき謀計とありて公儀と賺して
諸人の後世此のまじき人として清貪欲非義の
網を張り居あつた萬人をさるゝめてゆのれり
身と富貴するまじき不仁の是きもの也
王守一の悪ある事又最るまじき町人の作者
第一初まき處たりと語つ終

町人囊卷四終

